

「見捨てられ抑うつ」尺度の作成とその検討

筑波大学大学院(博)心理学研究科 佐々木裕子

筑波大学心理学系 小川 俊樹

On abandonment depression: A preliminary study

Hiroko Sasaki and Toshiki Ogawa (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*)

The purpose of this study was to recognize the mental problems of adolescence as Abandonment Depression. First, an Abandonment Depression Scale(ADS) was constructed to assess Abandonment Depression in normal young adults. This scale and the CES-D(Center for Epidemiologic Studies-Depression) translated into Japanese were administered to 128 (56 male and 72 female) university students. From the results, it was difficult to differentiate Abandonment Depression from depressive mood. Nevertheless, the scale indicated that the basic features of Abandonment Depression are not only alienation and loneliness but also hopelessness and the vagueness of self-consciousness. Second, the Thematic Apperception Test(TAT) and K-SCT(Structured Sentence Completion Test) were used to assess the representation of interpersonal relations among the high score group (6 persons) and the low score group (7 persons) of the ADS. Within the high score group, affectiveless and defensive interpersonal relations were projected as the separation stimulus. From this, it seemed that the problems of the individuation and separation from the mother were factors still at work.

Key words: Abandonment Depression Scale, mother-child separation, Thematic Apperception Test(TAT), K-SCT(Structured Sentence Completion Test).

はじめに

青年期は親からの分離独立という“親の喪失”と、心身の急激な変化・成熟による“新しい自分の獲得”を同時に経験する『喪失と獲得の狭間に立つ』(清水, 1990) 時期であるといわれている。そのため、この時期の青年の心理的動揺は清水の指摘するように不安と抑うつとの両者から理解する必要がある。その意味で、青年期に生じる情緒的問題を乳児期(1才半から2才くらいの分離-個体化におけるいわゆる再接近期)の母子関係の問題の再燃として提唱した Masterson (1972, 1980) の「見捨てられ抑うつ (abandonment depression)」の概念は、青年の不安定な心理を理解する上で重要なものと思われる。

「見捨てられ抑うつ」は、乳児期(分離-個体化期)

に母親と適切な情緒的交流を行えなかったために、母親から分離し自立しようとする自然な発達過程を否定されたかのように感じることから生じる感情状態であり、自己の体の一部を失ったかのような耐え難い無力な感情であるとされている。自然な発達過程として喪失と獲得の狭間に立つことになる青年期は、第2の分離-個体化期と考えられ、乳児期に体験するような「見捨てられ抑うつ」を抱きやすい情緒的交流が再活性化される時期であると考えられている。この概念は、青年期に様々な精神病理を示す若者の精神状態やその病因を理解し、彼らに対する心理療法に大きな示唆を与えている。

しかしながら、価値観が多様となり、あらゆるものが曖昧で非永続的で、一貫したものではなくなっ

てきている現代の社会では、多くの人々一特に若者一は、安定した対象(人)と関わる機会を逃し、自己の安定感を得ることができず、絶えず周りから“見捨てられる”のではないかといった不安の中で生活することを強いられているのではなからうか。このような観点にたつと、臨床の場に登場する者に限らず、多くの若者が「見捨てられ抑うつ」として特徴づけられる心理状態や対人関係の問題を抱えやすくなっていると考えられよう。こうした中で青年期は、自己を見いだし、家族から自立することを課せられ、現実にもまた精神的にも重要な“別離もしくは喪失”(自立という意味で)の体験を経験しなければならないのである。

とはいえ、現在「見捨てられ抑うつ」は心理療法という場でのみ記述され得るとされており、感情成分と考えられる6つの感情(抑うつ、憤怒、恐れ、罪責感、受動性と孤立無援感、空虚感)についても曖昧なままである。そこで、「見捨てられ抑うつ」という視点から青年が体験する不安や抑うつを捉え直し、それがどういった心理状態であるかを検討することは、現代の青年が抱える様々な心理的問題を理解する上で重要な知見を与えてくれるものと考えられる。

また、「見捨てられ抑うつ」は、母親との密接な関係を根とし、その後の対人関係や自己の安定感などにも影響するものと考えられているため、「見捨てられ抑うつ」を考える上で対人交流としての母子関係を無視することは決してできない。だが、ここで云う母子関係は、Mahler(1975)も指摘するような現実の母親との関係を問題にしているのではなく、内的対象表象としての母親表象であり、対象関係である。

母子関係に関する従来の研究は、現実の母子間の行動観察によって母子関係を測定するものであり、自己や他者の表象を評価する対象関係論的アプローチとは別のものであった。しかし、近年、心的表象としてのアタッチメントの側面が見直され、青年のアタッチメントを評価する研究(Kobak & Sceery 1988; Levine et al., 1991; Sperling et al., 1992)がなされている。とはいえ、このようなアプローチは、内的対象表象を捉えるという対象関係論的視点よりも、母子のアタッチメントを強調したものとなっている。従って、母子関係における感情の質や母子関係についての表象を捉えるといった試みはあまりなされていない。その意味からも、母子関係に代表される対人交流の感情的な質を検討することは、「見捨てられ抑うつ」を考える上で重要な示唆を得ることになると思われる。

研究1 大学生における「見捨てられ抑うつ」尺度作成の試み

1. 目的

本研究では、青年期における自己と他者にまつわる不安定で否定的な抑うつ感情を「見捨てられ抑うつ」の視点から理解し、現代の青年に見られる心理状態について理解することを試みた。そのために、大学生が体験する「見捨てられ抑うつ」がどういった心理状態であり、こうした感情をどの程度大学生が感じているかを捉えるため「見捨てられ抑うつ」尺度の作成を意図した。

2. 方法

a. 質問紙の作成

「見捨てられ抑うつ」尺度の質問項目を作成するにあたって、既成の質問紙(メランコリー型性格特徴を記述したF-List 質問紙(佐藤他, 1992); 境界性人格の傾向を測定するBorderline Syndrome Index(Conte, H.R, 1980; 町沢, 1990); 性格検査として広く使用されているY-G 性格テスト)を参考に、「見捨てられ抑うつ」を構成する6つの感情成分(抑うつ、憤怒、恐れ、罪責感、受動性と孤立無援感、空虚感)を表すと考えられる項目を抽出した。これらの項目は、「見捨てられ抑うつ」について説明を受けた2人の臨床心理学専攻の大学院生によって検討され、64項目が選択された。この64項目について4件法で評定させる質問紙が作成され、予備調査が行われた。

予備調査の対象は、心理学の授業を受講している大学生計151名(男59名, 女92名, 平均年齢20才)であった。調査の結果3因子構造が見いだされ、最も寄与率の高い(16.07)因子1が抽出された。因子1は、仮定された6項目すべての項目にわたって因子負荷量の高い項目があり、6つの感情の複合した因子であり、「見捨てられ抑うつ」として妥当であると考えられた。そこで、因子1に40%以上の因子負荷量をもつ項目28問が抽出され、「見捨てられ抑うつ」尺度(以下ADS; Appendix 1)質問紙が作成された。質問紙には、「抑うつ」と比較することを考慮して、ここ1週間における抑うつ的な気分について評価するCES-D (Center for Epidemiologic Studies-Depression) (Roberts, 1980)の日本語版(Appendix 2)が添付された。

b. 調査対象

心理学の授業を受講している大学生130名に質問紙を実施し、そのうち不良値のある者を削除した128名(男56名, 女72名, 平均年齢19才)が調査対象

となった。

c. 手続き

調査は、心理学の授業時間の一部を使い調査者の教示により集団で実施された。回答は、0：ほとんどそう思わない、1：あまりそう思わない、2：だいたいそう思う、3：かなりそう思う、の4段階評定でなされた。

3. 結果

ADSの平均得点は22.9($s=10.64$)で、男性22.7($s=10.72$)、女性23.1($s=10.58$)であった。抑うつ尺度であるCES-Dの平均値は16.0($s=9.07$)で、男性17.2($s=10.50$)、女性15.1($s=7.65$)であった。どちらも男女間に有意な差はみられなかった(Welchの検定 $t=1.26$, $df=97$, $p=.21$)。また、ADSとCES-Dは、ピアソンの積率相関係数 $r=.59$ であり、男女別でも男性 $r=.62$ 、女性 $r=.58$ であった。

次にADSを因子分析によって検討したところ、5因子構造が見いだされたため、バリマックス法によって回転し、各因子の因子負荷量を求めた(Table 1-1)。因子Iの因子寄与率は10.27と高く、自己意識の曖昧さと考えられる項目(7項目)であり、自分を「つまらぬ人間」と感じ「尊敬することが出来ず」、「何をしたいのか」わからず、「内面が空虚」な不安定な自己しか抱けないといった項目であった。次の因子IIは因子寄与率9.22で、「自分の人生を生きることができず」、「自分でコントロール」することも、「人生に立ち向かう」こともできないような絶望感や無力感といった抑うつ感に近いと考えられる項目(7項目)であった。因子IIIは寄与率9.05で、「自分に好感を持っていない人がたくさん」いて、「誰も私を好きにならず」、「認めてくれない」状態で、その上「友人を作ることが下手」で、そういう「自分を憎んでいる」というような、人に受け入れられない自分とそうした自分を否定するような疎外感と考えられる項目(7項目)であった。因子IVは、「親しい個人的関係を持つことを恐れ」ていて「親友でも本当に信用することができず」、「長く友人づきあいができず」、「真の友人を持つ」ことができないで、「人生に希望はない」と感じてしまうような対人関係の問題としての対人不安ないし対人不信(6項目)と考えられ、寄与率は8.33であった。因子Vは、「孤独」で、「いつも見放され」「自分一人」といった孤独感と考えられる項目(4項目)で、寄与率は7.10であった。

Table 1-1 「見捨てられ抑うつ」尺度(ADS)の因子分析結果

因子	(因子寄与率)	負荷量
因子I「自己意識の曖昧さ」(10.27)		
19.私の内面は空虚だと思う		.66
15.時々自分をつまらぬ人間だと思ふことがある		.64
16.この先何をしたいのか私にはわからない		.64
11.私は自分自身を尊敬することが出来ない		.58
1.何をしても熱中する事は出来ない		.50
20.自分が他人に必要とされている人間とは思えない		.40
9.時々何に対しても興味がなくなる		.37
因子II「絶望感・無力感」(9.22)		
25.私は自分の人生を生きることができないと思っている		-.66
4.私は人生に立ち向う力が無いと感じている		-.60
10.自分の人生を自分でコントロールできないと思う		-.60
13.私は何でも新しいことが恐い		-.48
31.人生に希望はないと思う		-.43
37.人間関係の中に入ると私は自由ではなくなくなってしまふように感じる		-.39
23.私は人生の失敗者だ		-.36
因子III「疎外感」(9.05)		
35.私は自分を憎んでいる		.56
32.私は友人を作ることが下手である		.55
26.誰も私を好きにならない		.52
24.自分に好感を持っていない人がたくさんいるような気がする		.53
20.自分が他人に必要とされている人間とは思えない		.49
17.人は私を十分に認めてくれない		.48
23.私は人生の失敗者だ		.47
因子IV「対人不安ないし不信感」(8.33)		
14.私は真の友人を持っていない		.67
28.私は他人との親しい個人的関係を持つことを恐れている		.64
29.親友でもほんとうに信用することはできない		.59
22.私は長く友人づきあいができない		.51
31.人生に希望はないと思う		.40
35.私は自分を憎んでいる		.39
因子V「孤独感」(7.10)		
6.たいてい私は孤独だと思う		-.66
7.私は周囲の人や物事からいつも見放されている気がする		-.54
2.結局は自分一人である		-.51
8.私がいけない方がむしろ家族はうまくやっていくだろう		-.39

4. 考察

本研究では、「見捨てられ抑うつ」尺度(ADS)と抑うつ尺度であるCES-Dに中程度の相関が認められており、本研究において「見捨てられ抑うつ」と「抑うつ感」を明確に区別することは困難であった。しかしながら、男女別で見た場合、有意差は見られなかったものの「見捨てられ抑うつ」尺度は女性の方が高いのに対し、CES-Dは男性が高いという相反する結果を得た。このことは、「見捨てられ抑うつ」を抑うつ感とは異なったものとして理解することが可能であることを示唆するといえるかもしれない。つまり、女性の方に無力感や無価値観、対人関係における不安や失望感、空しさとして感じられる「見捨てられ抑うつ」が強いと考えられるのである。

さらに本研究で作成した「見捨てられ抑うつ」尺度の項目を検討すると5つの因子(第Ⅰ「自己意識の曖昧さ」、第Ⅱ「絶望感・無力感」、第Ⅲ「疎外感」、第Ⅳ「対人不安」、第Ⅴ「孤独感」)が見いだされた。これらの5つの因子は「見捨てられ抑うつ」の感情成分として指摘されているものとほぼ類似したものと考えられる。しかしながら、第Ⅰ因子の「自己意識の曖昧さ」に関しては、「見捨てられ抑うつ」の「空虚感」と「抑うつ感」の複合したものに、さらに自己否定的な「罪悪感」や「孤立無援感」などが絡み、自己の存在感の未確立さとして表現された因子と考えられる。これは、町沢(1990, 1991, 1992)が、青年のボーダーラインの内的メカニズムについて、同一性障害を強調していることと関連するだけではなく、大野(1992)が指摘したような境界性人格障害者が持つ“1人であるときの現実感消失とも言えるような体験”、または、Schwartz-Salant(1990)が指摘した見捨てられ感の結果生きる意味が感じられなくなり、現実感が失われてしまう感覚などに通じるものであると思われる。

このように、「見捨てられ抑うつ」を考える際、対人関係での見捨てられることの不安や、見捨てられたことに対する疎外感や孤独感よりも、その前景に抑うつ感と絡んだ絶望感や無力感が意識され、さらには、罪悪感とも関係した自己否定的な“自己”の存在の曖昧さといった感情が主体となるものであると考えられるのである。これは、「見捨てられ抑うつ」が、単に人から見捨てられたために引き起こされる抑うつとしてではなく、人間にとって必要不可欠な自己の成長発達に対する情緒的な支持を得られなかったことから、自己の存在意義そのものを喪失したように感じてしまう耐え難い無力な感情状態であるということを考えれば、まさに的を得たものであろう。

しかしながら、本研究で作成した「見捨てられ抑うつ」尺度では、既に述べたようにいわゆる抑うつと明確に区別することはできていない。また、本研究は健常群での調査であるため、「見捨てられ抑うつ」が実際の問題として重大な影響を与えている臨床群に関する検討が必要不可欠であると考えられる。以上のことから、「見捨てられ抑うつ」を捉えるためには、本研究で作成した「見捨てられ抑うつ」尺度を今後さらに改良し、妥当性、信頼性の検討を行なう必要がある。

研究2 大学生における「見捨てられ抑うつ感」の理解の試み

1. 目的

本研究では、研究1の「見捨てられ抑うつ」尺度の得点の高い群と低い群を比較することで、大学生の体験している「見捨てられ抑うつ」を、母子関係を中心とした対人交流の特徴(特に対象表象)や対人関係における感情的な質といった視点から理解することを意図した。

2. 方法

a. 調査対象

研究1の対象者の中から「見捨てられ抑うつ」尺度得点の高群と低群を以下の基準によって抽出した。高群(H群)は、抑うつ気分が高いと考えられるCES-Dの得点が集団の平均から1SD以上の者は除外し、「見捨てられ抑うつ」尺度の得点のみが集団の平均から1SD以上の者とし、低群(L群)は、「見捨てられ抑うつ」尺度の得点が平均から1SD以下の者とした。その結果、H群11人(「見捨てられ抑うつ」尺度平均値39.5($s=4.29$)), L群22人(「見捨てられ抑うつ」尺度平均値8.1($s=2.98$))であった。そのうち、個別面接の調査を依頼したところ、許可を得たのはH群6人(男3人, 女3人), L群7人(男4人, 女3人)の計13人であった。

b. 手続き

調査は個別面接方式で行いTAT(Thematic Apperception Test)とK-SCT(構成的文章完成法)の2つの投影法テストを行った。

TATの実施にあたっては、記録のために録音することの許可を求めた後、山本(1992)を参考に次のように教示した。

「これから6枚の絵をお見せします。絵を見てそこから感じることをもとに自由にお話を作って下さい。その時の注意点として、そこにいる人が何を考え、何を感じ、何をしているのか、これから何をしようとしているのかを含んだ物語を作って下さい。」

以上のように教示した後、TAT図版を1枚ずつ手渡し、ストップウォッチで、(1)カードを渡してから話し始めるまでの時間(初発反応時間)と、(2)物語を作り終わった時間(反応時間)を測定した。

K-SCTは、TAT実施の前か後に施行し、テスト用紙を提示して、「ここに未完成な言葉が並んでいます。この言葉に続けて文章を作って下さい。文章力のテストではないので、思いついたことを自由に書いて下さい。」と教示して記入を求めた。被検者の質問に対しては適宜検査者が答えた。

c. 実施テスト

TAT(Thematic Apperception Test)

本研究では、特に母子関係における対象表象を捉えることを目的としていたため、ハーバード版の6枚のカード(2, 5, 6BM(男性), 7GF(女性), 13B, 19)を採用した。これらに、導入カードとして1カードを加えることで、各被検者に計6枚のカードを実施した。

K-SCT(構成的文章完成法)

本テストは、反応の分析・解釈の簡便化と数量化を可能にするために、片口ら(1989)によって開発された文章完成法テストである。本研究では、対象表象や対象関係の情緒的質を検討することを目的としたため、対人関係に関する刺激文である「対人態度」と「反応様式」についての項目を採用した。

d. 結果の処理

TATの分析方法

TAT反応の結果は、以下の5種類の側面から検討した。まず、量的データとして、①初発反応時間と反応時間の平均、②母親(両親)の出現頻度、が算出された。次に質的データとして、③物語の内容(登場人物の間柄とその関係に緊張・葛藤があるかないかを7種類に分類)、④人間関係のパターン(Ehrenreich(1990)のdependency patternの分類基準に従い、依存と独立の4パターンに分類)、⑤物語の情緒的雰囲気(緊張・弛緩に関する10項目の形容詞対を使ったSD法によって評定)が評価された。評価にあたっては、心理学専攻の大学院生3人が個別に物語の逐語記録を読み、指定された評価用紙に従って評定を行った。

K-SCTの分析方法

本研究で使用した刺激文は、反応文を11種類のカテゴリーに分類するように作られている。基本的には、反応文が肯定感情に基づいているか否定感情に基づいているかに焦点を当てて分類するが、それ以外に両価感情、中性感情、分類不能のカテゴリーが設けてあり、必ずどれかしらに分類するようになっている。記号化に際しては、心理学専攻の大学院生2人に、カテゴリーの分類基準についてのマニュアルを読んでもらい、そのマニュアルに則って個別に分類を依頼し、研究者自身も盲検法で分類を行い、2人以上が一致した記号を採用した。分類後、解釈に便利のように既定の6つの指数を算出した。

3. 結果

TATの結果

①初発反応時間と反応時間の平均

H群, L群ともに最初の1カードでは物語を話し

始めるまでの時間(初発反応時間RIT)が最も短く、最後の19カードで最も長いという傾向が見られた。

さらに、どのカードもH群がL群よりも初発反応時間(RIT)は早い。6BM/7GFカードと13Bカードでは、H群はL群よりも長い間カードに対して反応をしていた結果となっている。しかし、こうした違いをU検定によって検定したが有意ではなかった。

②母親(両親)の出現頻度

6枚のカードに母親が全く登場しなかった人はおらず、少ない人で1枚、多い人で4枚のカードに登場していた。カード別では、H群は6BM/7GFカードに母親が登場した人が最も多く(6人中5人)、L群では5カードに母親が登場した人が最も多かった(7人中6人)。

また、H群とL群を比較すると、母親反応の頻度の平均はH群で2.0、L群で2.3で、両群の母親反応の頻度をU検定によって比較したところ、両群に有意な差はなかった($Z = .84, p = .40$)(Table 2-1)。

③物語の内容

物語の登場人物が母親と子供(mother-child)についての物語である頻度は、H群とL群に目立った違いは見られなかったが、家族や親戚、知り合い(familiar person)の物語の頻度は、H群で少なくL群でやや多くなり、逆に他人同士か、人物が登場しない(stranger or nonperson)物語の頻度は、H群で多くL群で少なかった。しかし、U検定による結果では、どの物語にも有意な差はみられなかった(mother-child; $Z = .15, p = .88$; familiar person; $Z = 1.57, p = .12$; stranger or nonperson; $Z = 1.45, p = .15$)。

次に物語の内容で見ると、H群は互いの関係や交流に葛藤がない物語(positive story)の頻度がL群より少なく、U検定による比較で5%水準で両群間の差は有意であった($Z = 2.12, p = .03 < .05$)(Table 2-2)。

Table 2-1 TAT 物語の母親反応の出現人数の比較

カード群	1	2	5	6BM 7GF	13	19	計 (回)
H (人) <6人>	0	1	4	5	3	0	13
L (人) <7人>	1	1	6	5	3	0	16
計 (人)	1	2	10	10	6	0	29

Table 2-2 TAT物語の物語内容の出現頻度の比較

分類規準	群	出現頻度(個) 別人数(%)				
		0	1	2	3	4
dependent	H 6人		2 (33)		3 (50)	1 (17)
	L 7人		4 (57)	2 (29)	1 (14)	
positive*	H 6人	2 (33)	2 (33)	2 (33)		
	L 7人		1 (14)	4 (57)	2 (29)	
negative or lack-rapport	H 6人		3 (50)		2 (33)	1 (17)
	L 7人	5 (71)	2 (29)			
vague	H 6人	1 (17)	2 (33)	2 (33)		1 (17)
	L 7人	4 (57)	1 (17)	2 (29)		

* p < .05

dependent: 甘えやわがままについての内容
(dependent story)positive: 互いの関係や交流に葛藤がない内容
(positive story)negative or: 互いの関係や交流に不安や緊張が含まれ
lack-rapport るか、もしくは交流に疎通性がない内容
(negative (fear or tension) or lack-
rapport story)vague: 関係を言及しないか、あいまいな内容
(vague story)

④人間関係のパターン

H群はL群に比べて独立/自立の物語が少なく、無関係の物語が多い傾向が窺えたが、有意差はみられなかった。また、依存関係は、H群L群に大きな差はなく、相互依存は、L群の中でも2人にあっただけであった。

⑤物語の情緒的雰囲気

物語の情緒的な雰囲気をSD法によって評価し、各カード毎のH群とL群の情緒的雰囲気の違いを検討した(Table 2-3)。その結果、1カードと5カードは両群に大きな違いは見られなかったが、2カードの物語は、L群よりもH群の方が有意に不安定な物語であった($Z=2.11$, $p=.03<.05$)(Fig. 2-1)。また、6BM/7GFカードでは、H群の方が緊迫した物語であるが、その反面、有意に生気のない物語であった($Z=1.68$, $p=.09<.10$)(Fig. 2-2)。また、13Bカードでは、L群は偏りのない物語であるのに対し、H群は極端にのんびりし、単調な物語であ

た($Z=2.34$, $p=.02<.05$)。さらに、19カードではL群よりもH群の方が固く、とげとげしい感じの物語であった($Z=1.96$, $p=.05<.10$)。つまり、H群は2カード、6BM/7GFカード、13Bカードにおいて緊張の高い雰囲気の物語を作る傾向が高かった。

K-SCTの結果

各指数のメディアンによって2分割し、 2×2 (メディアンより高いか低いか×H群かL群)のクロス表によって分布の偏りを検定した。その結果、どの指数にも両群に有意な差は見られなかったが、H群は準防衛指数、否定指数、消極指数が高い人が多く、肯定指数、積極指数は低い人が多かった。これに対し、L群は、否定指数を除いてすべての指数でH群とは逆の傾向が見られ、肯定指数、積極指数が高かった(Table 2-4)。

反応例

H群の被検者(女性): 本被検者には、「見捨てられ抑うつ」尺度(ADS)得点が高いと考えられる者に典型的な特徴が見られた。まず、TATにおいて父親、母親、娘といった関係や、家族からの自立のテーマが語られやすいとされる2カードにおいて、本被検者はそうした人間関係を形成することができず、以下のような消極的な関わりしか表現できなかった。

『休暇中に学校から田舎に遊びにきていて、田舎道を歩きながら、脇で農作業をしていたり、休んだりしている人を見ている。(その人はどんな人?)家族とはあまり親しくなくて、学校行ってからは会っていない、家族には会っていないというか、で、知り合いの田舎に、遊びにきていますと……』

さらに、13Bカードでは、

『男の子は、仕事に出かけた両親の帰りを、お腹を空かせて待っている。……と、何時間も待てるけども、なかなか帰って来ないので、玄関で、道を見ながら、帰ってこないかなと、途方にくれている』

このように、2カードで「親しくなく」「会っていない」両親は、13Bカードでも、「お腹を空かせ」たまま子供を待たせている。さらに、そうした両親に対して子供は、ただ「見ている」か、「途方にくれる」しかないのである。このカードは、両親の不在に対する不安や孤独感が表現され、自分の存在の無意味感が賦活されるとされている。本被検者が、そうした不安に対して対処する術もなく、途方にくれている様子が想像される。こうした傾向は、「見捨てられ抑うつ」尺度において指摘された対人的な疎外感や見捨てられることへの不安や孤独感の前景に自己意識の曖昧さや無力感・絶望感が表れるとい

Table 2-3 TAT物語のSD評定平均値の比較

形容詞対	群	カ ー ド					
		1	2	5	6/7	13	5 19
のどかな感じ	H	4.41	3.83	4.17	5.08	3.50	5.08
緊迫した感じ	L	4.86	3.00	4.07	4.14	3.79	4.50
穏やかな感じ	H	4.17	3.08	3.75	4.58	3.33	4.92
はげしい感じ	L	3.86	3.07	4.00	4.00	3.79	4.36
やわらかな感じ	H	5.33	5.00	4.42	5.50	4.33	4.92#
固い感じ	L	5.36	4.36	4.93	4.65	4.14	4.07
ゆったりした感じ	H	5.42	4.75	4.58	5.42	4.17	5.00
張りつめた感じ	L	4.79	3.79	4.50	4.57	4.07	5.50
のんびりした感じ	H	3.75	3.33	3.92	4.42	2.75*	4.67
せわしない感じ	L	4.00	3.50	4.64	3.86	3.79	4.36
変化に富んだ感じ	H	5.00	4.83	3.67	3.50	5.67*	3.92
単調な感じ	L	4.79	4.43	4.50	4.00	4.21	3.36
生き生きした感じ	H	4.67	5.33	4.50	4.33#	4.83	4.75
生気のない感じ	L	4.86	4.07	4.14	3.43	3.57	3.29
安定した感じ	H	5.00	4.92*	4.75	5.00	4.58	4.92
不安定な感じ	L	4.71	3.50	4.36	4.43	4.57	4.64
なごやかな感じ	H	4.50	4.08	4.33	4.42	4.33	4.33#
とげとげしい感じ	L	4.14	3.57	3.93	3.57	3.86	3.43
深みのある感じ	H	4.25	4.67	4.50	4.08	3.92	3.50
薄っぺらい感じ	L	3.86	4.14	4.29	5.50	4.43	3.00

p<.10

* p<.05

た特徴を表していると思われた。

K-SCTでは、内容が乏しく、感情的表現の少ない簡潔なものであり、感情を防衛し、関与の少ない印象を受ける文章であった。特に両親に関する刺激文は、以下のような反応であった。

父についての最初の思い出は 仕事の帰りに私を向かえに来てくれていたことです。

父といるときに、いつも感じたことは 疲れているのかな、ということでした。

母についての最初の思い出は 彼女が弟を抱いていたことです。

母といるとき感じるのは 安心感とうんざりする気持ちです。

このように、書かれた内容に何らかの感情体験が想像されるにもかかわらず、直接的な感情表現がされていないものが多く、豊かな情緒的交流を想像することは難しい反応である。特に母親に対しては両価的感情が言及されており、母親との不安定な関係が想像された。こうした特徴は、「見捨てられ抑うつ」

の高い者の両親との関係における問題を象徴していると考えられた。

4. 考察

本研究では、「見捨てられ抑うつ」尺度(ADS)得点の高い者と低い者について、母子関係にまつわる対象表象や感情的な質の違いをとらえることを試みた。

まず、TATにおいて、家族からの自主・独立、もしくは母親からの自立や分離のテーマが触発されるカードに対する対人関係の対象表象と感情的な質を検討したところ、ADSの得点が高かったH群は、低かったL群よりも母親や身近な人との交流を投影することが少なく、感情交流のない不安や緊張の高い物語を作る傾向が高かった。これは、H群が“母親からの分離”の問題と関係する「見捨てられ抑うつ」をL群よりも強く抱いているために、そうした問題に取り組むこと自体が困難であったためではないかと考えられる。つまり、L群の人は、“母親か

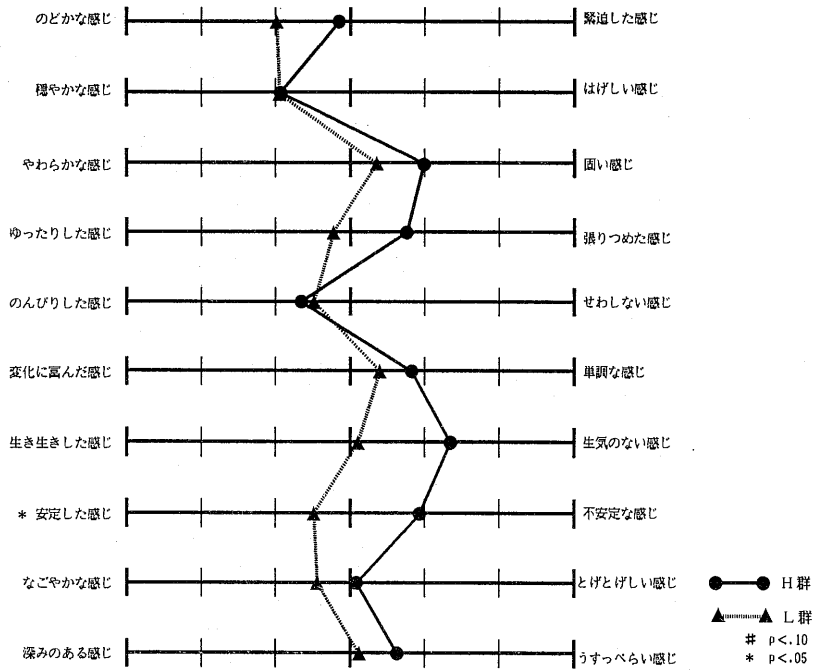


Fig. 2-1 TAT 2 カードのSD 評定図

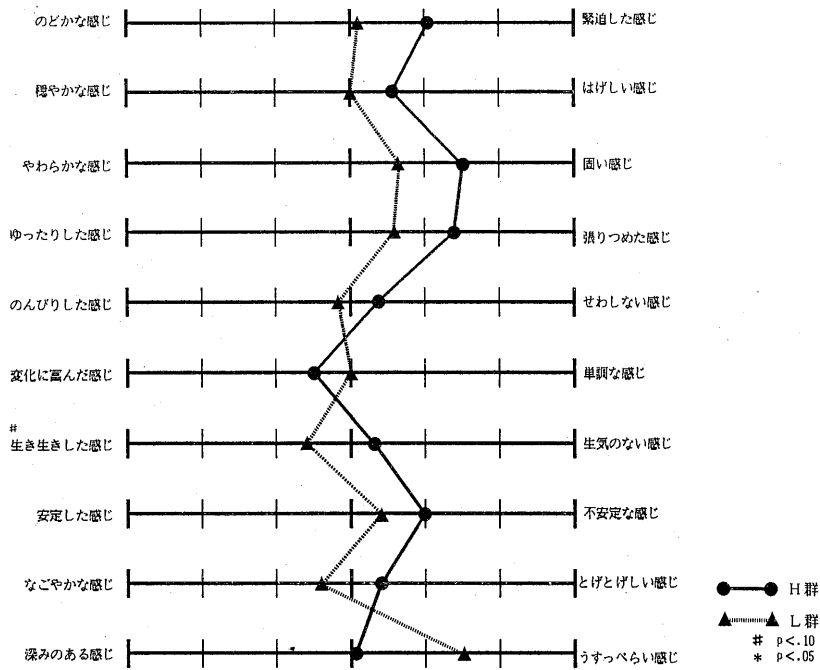


Fig. 2-2 TAT 6/7 カードのSD 評定図

Table 2-4 K-SCTの各指数のメディアン分割によるクロス集計表

指数	df%		Pos%		Neg%		Amb%		Act%		Pass%	
	H	L	H	L	H	L	H	L	H	L	H	L
メディアン	29.17		29.17		29.17		4.17		25.0		37.5	
群	H	L	H	L	H	L	H	L	H	L	H	L
メディアンより 低(人)	1	<u>5</u>	<u>4</u>	2	1	4	<u>3</u>	1	<u>4</u>	1	1	<u>4</u>
メディアンより 高(人)	<u>4</u>	2	2	<u>4</u>	3	3	2	<u>3</u>	2	<u>4</u>	<u>4</u>	2

df% : 準防衛指数
 Neg% : 否定指数
 Act% : 積極指数
 Pos% : 肯定指数
 Amb% : 両価指数
 Pass% : 消極指数

らの自立”といったカード特性に刺激された内容を表現することが可能であったのに対し、H群の人は、そうした問題が未解決のまま残っているために、自立や分離の不安や葛藤に直面することができず、そうした問題を回避して、不安や緊張の高い情緒的交流が伴わない物語を作ることになったと考えられるのである。

こうした傾向は、K-SCT(構成的文章完成法)において、防衛的傾向が高く、感情を直接表現しないという傾向が示されたこととも一致しており、「見捨てられ抑うつ」といった問題を抱えている者には、あらゆる対人関係において情緒的交流が乏しいことが想像される。さらに、このことは、「見捨てられ抑うつ」が中心的な問題とされている境界例患者において、親しい関係を築く能力の欠如(疎隔感)や対人関係における成熟や自立に伴う見捨てられることに対する過敏さ(不安定なアタッチメント)を指摘したBell(1986)らの研究結果を考慮すると、H群の特徴として重要な意味をもつものと考えられる。

しかしながら、本研究において捉えた「見捨てられ抑うつ」尺度が境界例患者の体験する「見捨てられ抑うつ」と同一のものであると考えることは早計である。また、「見捨てられ抑うつ」尺度が高いとされたH群の抱える問題が「見捨てられ抑うつ」のみであるとすることはできないであろう。

さらに、本研究ではTATを使うことで母子関係における対象表象についての検討を試みたが、「見捨てられ抑うつ」とそれに影響された他人関係の問題を考える上で不可欠となる対象恒常性の程度について検討することは、十分な臨床的経験や熟練を要するため不可能であった。しかし、「見捨てられ抑うつ」を捉えるためには今後そうした評価の可能性

も模索していくことが必要不可欠である。しかも、本研究で行った方法で対象表象や対人関係を捉えることが妥当であるかについても批判のあがる点であろう。今後被検者を広げて評価方法の検討を行なうとともに、臨床現場や年齢を越えた研究を行うことでより詳細に「見捨てられ抑うつ」を検討していく必要がある。

まとめ

本研究では、青年の心理的問題を「見捨てられ抑うつ」の視点から理解することを意図した。そのためにも、「見捨てられ抑うつ」尺度(ADS)の作成を試みた。予備調査によって28項目の「見捨てられ抑うつ」尺度を作成し、抑うつに関する質問尺度CES-D (Center for Epidemiologic Studies-Depression)日本語版を添付して大学生128名(男性56名、女性72名、平均年齢19才)に実施した。その結果、抑うつと明確に区別するのは困難ではあるが、「見捨てられ抑うつ」は、見捨てられたことに対する疎外感や孤独感だけでなく、絶望感や自己の存在の曖昧さといった感情が主体となるものと考えられた。さらに、TAT(Thematic Apperception Test)とK-SCT(構成的文章完成法)の2つの投影法テストによって、「見捨てられ抑うつ」尺度得点が高い群(H群6名)、低い群(L群7名)の対人関係の表象について検討した結果、H群は母親からの自立や分離の問題が未解決のまま残存し、分離に関する刺激が与えられた場合、感情交流の少ない、表面的な対人関係しか投影できない傾向が窺えた。

文 献

- Bell, M., Billington, R. & Becker, B. 1986 A Scale for the assessment of object relations: reliability, validity, and factorial invariance. *Journal of Clinical Psychology*, **42**, 733-741.
- Conte, H.R., Plutchik, R., Karasu, T.B. & Jerrett, I. 1980 A self-report borderline scale: Discriminative validity and preliminary norms. *The Journal of Nervous and Mental Disease*, **168**, 428-435.
- Ehrenreich, J. H. 1990 Quantitative studies of responses elicited by selected TAT cards. *Psychological Reports*, **67**, 15-18.
- 片口安史・早川幸夫 共著 1989 構成的文章完成法 (K-SCT)解説 日本総合教育研究所
- Kobak, R.R. & Sceery, A. 1988 Attachment in late adolescence: Working models, affect regulation, and representations of self and others. *Child Development*, **59**, 135-146.
- Levine, L.V., Tuber, S.B., Slade, A.S. & Ward, M.J. 1991 Mothers' mental representations and their relationship to mother-infant attachment. *Bulletin of the Menninger Clinic*, **55**, 454-469.
- 町沢静夫 1990 ボーダーラインの心の病理 —自己不確実性に悩む人々— 創元社
- 町沢静夫・佐藤寛之 1991 境界型人格障害の下位分類の試み：ボーダーラインスケールの数量的解析を通じて 精神医学, **33**, 1201-1209.
- 町沢静夫・原節子 1992 境界型人格障害に見られる見捨てられ感の分析 精神療法, **18**, 531-539.
- Mahler, M. 高橋雅士・織田正美・浜畑紀(訳) 1981 乳幼児の心理的誕生 母子共生と個体化 黎明書房
- (Mahler, M.S., Pine, F. & Bergman, A. 1975 *The Psychological Birth of the Human Infant Symbiosis and Individuation*. London; Hutchinson & Co.)
- Masterson, J.F. 成田善弘・笠原嘉(訳) 1979 青年期境界例の治療 金剛出版
- (Masterson, J.F. 1972 *Treatment of the borderline adolescent; A Developmental Approach*. New York; John Willey & sons.)
- Masterson, J.F. 作田勉・恵智彦・大野裕・前田陽子(訳) 1982 青年期境界例の精神療法 星和書店
- (Masterson, J.F. 1980 *From boederline adolescent to functioning adult the test of time*. New York; Brunner/Mazel Publishers.)
- 大野裕 1992 境界性人格障害と不安 臨床精神医学, **21**, 705-712.
- Roberts, R.E. 1980 Reliability of the CES-D scale in different ethnic contexts. *Psychiatry Research*, **2**, 125-134.
- Schwartz-Salant, N. 1990 The abandonment depression: Developmental and alchemical perspectives. *Journal of Anaclitical Psychology*, **35**, 143-159.
- 佐藤哲哉・坂戸薫・小林慎一 1992 質問紙法によるメランコリー型性格の測定 精神医学, **34**, 139-146.
- 清水将之 1990 青年期と現代 弘文堂
- Sperling, M.B., Berman, W.H. & Fagen, G. 1992 Classification of adult attachment: An integrative taxonomy from attachment and psychoanalytic theories. *Journal of Personality Assessment*, **52**, 239-247.
- 山本和郎(著) 1992 心理検査 TAT かかわり分析 —ゆたかな人間理解の方法— 東京大学出版会
- 1993. 9 .30受稿—

Appendix 1

「見捨てられ抑うつ」尺度(ADS)項目

何をしても熱中することはない
結局は自分一人である
私は人生に立ち向う力がないと感じている
たいてい私は孤独だと思う
私は周囲の人や物事からいつも見放されている気がする
私がない方がむしろ家族はうまくやっていくだろう
時々何に対しても興味がなくなる
自分の人生を自分でコントロールできないと思う
私は自分自身を尊敬することが出来ない
私は何でも新しいことが怖い
私は真の友人を持っていない
時々自分をつまらぬ人間だと思うことがある
この先何をしたいのか私にはわからない
人は私を十分に認めてくれない
私の内面は空虚だと思う
自分が他人に必要とされている人間とは感じない
私は長く友人つきあいができない
私は人生の失敗者だ
私は自分の人生を生きることができないと思っている
誰も私を好きにならない
私は他人との親しい個人的関係を持つことを恐れている
親友でもほんとうに信用することはできない
人生に希望はないと思う
私は友人を作ることが下手である
自分に好感を持っていない人がたくさんいるような気がする
私は自分を憎んでいる
人間関係の中に入ると私は自由ではなくなってしまうように感じる
人が見ていないとたいていの人は怠けると思う

Appendix 2

CES-D (Center for Epidemiologic Studies-Depression) 日本語版調査用紙

ここ1週間の間、あなたがどの程度以下のように感じたか、その程度を次の規準に従って当てはまるところに○印をつけて下さい。

あまり深く考えず、程度が低い場合を0、程度が高い場合を3として、どの程度かを選んで下さい。

- 0：ほとんどなかった
 1：たまにあった
 2：時折あった
 3：しばしばあった

ここ1週間の間

1. 普段なら悩むことのないことに悩んでいた。	0	1	2	3
2. 食べたいと思わなかった。もしくは、食欲がなかった。	0	1	2	3
3. 家族や友人がいても気が晴れなかった。	0	1	2	3
4. 人並に調子が良かった。	0	1	2	3
5. 自分のしていることに集中するのが難しかった。	0	1	2	3
6. 落ち込んだ気分であった。	0	1	2	3
7. 何をするのも億劫だった。	0	1	2	3
8. 将来は希望に満ちていると感じた。	0	1	2	3
9. 自分の人生が失敗であったと思った。	0	1	2	3
10. びくびくしていた。	0	1	2	3
11. 眠りが浅かった。	0	1	2	3
12. 幸せだった。	0	1	2	3
13. 普段より口数が少なかった。	0	1	2	3
14. 孤独を感じた。	0	1	2	3
15. 他の人がよそよそしく感じた。	0	1	2	3
16. 楽しかった。	0	1	2	3
17. 泣くことがあった。	0	1	2	3
18. 悲しいと感じた。	0	1	2	3
19. 人が自分のことを好いていないと感じた。	0	1	2	3
20. 何かを「始めよう」という気にならなかった。	0	1	2	3